チベットにおける胎蔵大日如来と胎蔵曼荼羅の伝承と作例について

田中 公明
東方研究会

1　はじめに

近年チベット密教の研究が進むにつれ、チベットの曼荼羅についても、学問的知見は飛躍的に拡大しつつある。しかし現在のチベット密教は、『金剛頂経』系の瑜伽タントラと、その発展形態である無上瑜伽タントラに重点を置いているため、従来の研究は、ほとんどが金剛界系の瑜伽タントラか後期密教系の無上瑜伽タントラの曼荼羅を扱ったものであった。これに対して、わが国で両部あるいは両界曼荼羅として、金剛界曼荼羅と並び称される胎蔵曼荼羅に関する研究は、ほとんど存在しなかったといってよい。

その中で先駆的な業績としては、栂尾祥雲が『曼荼羅の研究』に、チベット所伝の大日経曼荼羅の推定復元図を掲載したことが挙げられる。ついで酒井眞典、北村太道両教授によって、チベット訳のみが伝存するブッダグヒヤの『大日経広釈』や『大日経略釈』の研究が発表されたが、これらにも胎蔵曼荼羅への言及が少なからず見られる。

このようにチベット系の資料に基づく胎蔵曼荼羅の研究は、わが国にもいくつか存在したが、これらが発表された当時は、チベットに胎蔵曼荼羅の作例が現存することさえ、ほとんど知られていなかった。またこれらの研究は、チベット系の資料を用いて、インドの祖形を復元することを主な目的としていたので、チベットで胎蔵曼荼羅がどのように描かれるかという問題には、関心が薄かったという面は否めない。

ところが1959年のチベット動乱以後、チベットで撰述された胎蔵曼荼羅の儀軌類が、チベット難民によって復刻印刷され、入手できるようになった。また近年は、チベット各地で発見された胎蔵大日如来や胎蔵曼荼羅の作例や写真も、いくつか参照できるようになった。そしてこれらの資料と比較すると、従来の研究には、かなりの問題点があることが明らかになった。

いっぽう仏教の故国インドからは、胎蔵曼荼羅の作例は、いまだ発見されていない。しかしインドのオリッサで、胎蔵曼荼羅の主尊である胎蔵大日如来像が発見されたのを皮切りに、最近アジアの各地で、続々と作例が同定されるようになった。

また胎蔵大日如来に八大菩薩を配した作例も、８世紀から９世紀にかけて、アジアの各地に、かなりの作例を遺すことがわかった。発表者は、『敦煌 密教と美術』(法藏館)において、従来阿弥陀八大菩薩と考えられていた敦煌出土のStein Painting No.50が、胎蔵大日八大菩薩であることを指摘した。

同著は敦煌密教の研究書という性格上、チベットを含むアジアの他地域の作例については、十分論じることができなかったが、８世紀後半から９世紀にかけて、当時吐蕃が占領していた

シルクロード地域とチベット本土で、胎蔵大日八大菩薩像が、多数製作されたことが明らかになってきた。

そこで今回は、これらの新出資料に基づき、インドで成立した胎蔵系の仏教図像が、チベットをはじめとするアジアの諸地域に、どのように伝播し、またどのような作例を遺しているのかを考えてみたい。

この試みは、単にチベットにおける仏教図像の実体を解明するだけでなく、わが国の密教図像の根源をなす両界曼荼羅の起源を知る上でも、貴重な示唆を与えるものとなるであろう。

2　吐蕃占領下のシルクロード地域における胎蔵大日八大菩薩の作例

チベットでは、吐蕃時代に遡りうる胎蔵曼荼羅の作例は知られていないが、胎蔵曼荼羅の主尊である胎蔵大日如来に八大菩薩を組み合わせた作例が、複数製作されていたことがわかった。

まず発表者が『敦煌　密教と美術』で取り上げた大英博物館所蔵のStein Painting No.50は、いままで阿弥陀八大菩薩と考えられていたが、胎蔵大日八大菩薩の作例と考えるべきである。この作品については、すでに拙著で論じたので詳説しないが、八大菩薩のうち4尊には、チベット語で銘文が記入されており、吐蕃占領下の敦煌で製作されたものと推定される。

また安西榆林窟第25窟からも、吐蕃占領前期(776～781年)の成立と考えられる禅定印を結ぶ菩薩形の盧舎那仏と八大菩薩の壁画が発見されている。本尊盧舎那仏の左右には、4尊づつ八大菩薩が配されるが、このうち左辺(向かって右)の4尊は、壁面の損傷により失われている。いっぽう右辺の4尊は、記入尊名により、上段の2尊が虚空蔵・地蔵、下段の2尊が弥勒・文殊であることがわかる。

いっぽうNelson-Atkins Museum所蔵の木製三連仏龕は、出土地は明らかでないが、龕の中央に禅定印を結ぶ菩薩形の坐像を刻出し、その左右に縦一列に4体づつ、合計8尊の菩薩を配している。さらに本尊の下部には、施主と思われる比丘が現され、上空の2尊の菩薩のうち、向かって右側の1尊は比丘の頭を摩頂し、左側の1尊は瓶から水を注いで灌頂を授けている。この作品は、裏面にチベット語の銘文“Byang chub”を有することから、吐蕃占領期のシルクロード地域で製作されたと考えられている。(上記3作品の配置については51頁参照)

なお本尊と八大菩薩像の図像に関しては、前述のStein Painting 50や安西榆林窟像と、一部で興味深い一致が見られ、胎蔵大日八大菩薩の図像が、吐蕃占領下のシルクロード地域で、ある程度固定していたことが窺える。

さらに拙著の刊行後、朴亨國氏によって、敦煌莫高窟14窟主室南壁からも、胎蔵大日八大菩薩の壁画が同定された。

いっぽう文献資料では、敦煌莫高窟の蔵経洞から、『八大菩薩曼荼羅経』と、漢訳には対応するもののない『眷属を伴う毘盧遮那讃』のチベット訳断片が出土している。なお『眷属を伴う毘盧遮那讃』は、色究竟天(オクミン)に住する毘盧遮那を偈をもって讃えた後、①観音②弥勒③虚空蔵④普賢⑤金剛手⑥文殊⑦除蓋障⑧地蔵の順に八大菩薩を讃え、さらにこの後⑨維摩⑩宝吉祥Rin cen dpal⑪降三世の讃が続くが、これ以後のフォリオは失われている。

この八大菩薩の次第は、７世紀後半に漢訳された『師子荘厳王菩薩請問経』や『仏頂尊勝陀羅尼念誦儀軌法』に一致し、末尾に降三世の讃があることは、後述のサムイェー寺のごとく、毘盧遮那が八大菩薩に加え、不動・降三世の２尊を伴っていたことを示唆している。

このように、吐蕃占領下の敦煌で、八大菩薩の信仰が広く行われていたことは、文献の上からも確認できるのである。

3　吐蕃時代のチベット本土における胎蔵大日八大菩薩の作例

いっぽう中央チベットに目を転じると、775年に定礎したサムイェー寺のウツェ大殿に、本尊仏と八大菩薩の組み合わせが見られる。(52頁参照)

チベットの仏教史書『王統明示鏡』によると、ウツェの１階はチベット式で、釈迦如来の霊像を本尊として、左右には八大菩薩と喜吉祥菩薩dGa' ba'i dpalと維摩居士、不動・降三世の二大明王の合計13尊が安置された。また八大菩薩の安置状況は、釈迦如来を本尊として、右側に(虚空蔵)・弥勒・観音・地蔵、左側に普賢・金剛手・文殊・除蓋障であったとされている。

これに対して２階は中国式で、本尊の毘盧遮那の前面に三世仏と薬師、阿弥陀を安置し、左右には八大菩薩に上述の喜吉祥と維摩居士を配した。さらにその左右には、忿怒カンと忿怒キンを配したとされるが、これは漢語の「金剛」(キンカン)を音写したもので、中国式の金剛力士を安置したものと思われる。

さらに３階はインド式として、「一切に面する」つまり四面の毘盧遮那仏を本尊として、その四方に２尊づつ八大菩薩を安置したと伝えられる。これはオリッサのウダヤギリ仏塔や東寺五重塔、さらにジャワのチャンディ・ムンドゥーに類似する形態といえよう。

このうち２階の本尊は、単に「毘盧遮那」と呼ばれており、胎蔵大日、金剛界大日、『悪趣清浄タントラ』の一切智毘盧遮那の何れであったのか、明らかでない。また現状(文化大革命後の復旧)では、中心部の安置状況が変更されているので、かつてどのような毘盧遮那仏が安置されていたのか、不明である。

いっぽう３階の本尊は四面像なので、四面の金剛界大日か、一切智毘盧遮那であった可能性が高いが、現状(文化大革命後の復興)では、金剛界の四仏が背中合わせに安置されている。

また１階と２階では、八大菩薩に喜吉祥と維摩居士、そして２尊の忿怒尊が付加されているのが注目される。このうち八大菩薩に維摩居士を付加したのは、上述の『眷属を伴う毘盧遮那讃』に加え、韓国慶州の石窟庵にも通じるものといえる。

いっぽう不動・降三世の２尊を左右に配するのは、胎蔵曼荼羅の持明院や高野山の講堂(現金堂)にも見られる。また八大菩薩と不動・降三世という組み合わせが、不空系の尊勝曼荼羅と一致することも見逃せない。

さらにH・リチャードソンは、ニャンチュ渓谷のネーサルにも、吐蕃時代に建てられた大日如来堂があり、左右に八大菩薩が安置されると報告している。

残念ながら筆者が2001年９月に調査したところ、大日如来堂は、文化大革命中の破壊活動により、跡形もなく失われていた。またリチャードソンは、ネーサルの大日如来堂がオクミン'Og

min、すなわち「色究竟天」と呼ばれると報告している。これは同地に、五仏(サンギェー・リクガ)を安置するもう一つの大日如来堂(これも文化大革命中に破壊)があり、それと区別するための呼称と思われるが、前述の『眷属を伴う毘盧遮那讃』に通じる思想として注目される。

なおリチャードソンは、オクミン大日如来の図像については記述していない。ところが今回の調査で、ネーサルに唯一残される般若仏母堂(ユムチェンモ・ラカン)の管理人プンツォク氏(かつての寺僧)から、文化大革命で破壊される前の状況について、聞き出すことができた。

プンツォク氏によれば、五仏堂の本尊が金剛杵をもつ智拳印を結んでいたのに対し、オクミン大日如来は一面二臂で両手で禅定印を結んでいたとのことである。また八大菩薩の安置状況は、北面する本尊像の左右に4尊づつ並んでいたとのことで、入口には門衛として2体の不動尊が安置されていたという。これはおそらく、不動・降三世の二忿怒が、2体の不動尊と誤伝されたものであろう。

これによって、五仏堂の本尊が金剛界大日であるのに対し、オクミン大日如来は胎蔵大日であったことが確認された。

4　東チベットに見られる2件の現存作例

いっぽう東チベット(チベット自治区チャムド地区)のチャムドゥンと、同じ東チベットながら現在は青海省に属するジェクンド地区(玉樹県)のビド'Bis mdoからも、禅定印を結ぶ胎蔵大日と八大菩薩の摩崖仏が発見された。これらの摩崖仏の成立年代は、銘文によってチャムドゥン像が804年、ビド大日如来堂像は806年であることが判明している。

この両遺跡は、外国人の立ち入りが規制されている地域にあるため、細部の写真を入手することが困難だったが、2000年8月にＮＨＫ「薬草の花園～チベット医学師弟の旅4000キロ」の取材班がビドを訪れ、八大菩薩像の写真撮影に成功した。写真によれば、各菩薩にはチベット文字で銘(弥勒のみ写真では確認できない)が刻出されており、尊格を同定することができる。その綴字は、キクが一部で逆向きになるなど古様を示しており、造立当初のものである可能性が高い。これによって、拙著『敦煌　密教と美術』で紹介した『中国蔵学』(1988-4)所収の配置図が正しいことが確認された。(51頁中段右の表参照)

八大菩薩の服制は、上半身を裸体にして条帛をつける菩薩形ではなく、全身にチベット風の衣裳をまとっている。なお伝承によると、サムイェー寺院の建立にあたり、管長のシャーンタラクシタは、仏像に仏教の故国インドの様式を採用することを希望したが、ティソンデツェン王は、この提案をしりぞけ、家臣の中から容姿の優れた男女を選び、彼らに範をとってチベット風の仏像を造立したといわれる。八大菩薩の服制は、このような吐蕃の政策を反映するものかも知れない。

また像は、文化大革命後に塗り直されており、後述のように、修理によって旧状が損なわれた箇所も見うけられる。また天冠から両肩にかけて、後補の錦片が垂れ下がっており、持物の同定を困難にしている。

八大菩薩の持物は、観音の水瓶、虚空蔵の剣、金剛手の金剛杵が容易に同定できる。なお金

剛手は、チベットの基準から見れば法外に大きな金剛杵を、胸前に立てているが、敦煌出土の作品でも金剛杵は大きく現されているので、古様を示すものと見られる。

また地蔵と文殊はともに華を持つが、花弁の形状が異なり、地蔵の持物は開敷蓮華、文殊の持物はウトパラ蓮と推定される。

弥勒菩薩は左上隅に刻出されているので、フラッシュが届かず、良好な写真が撮影できなかったが、水瓶あるいは仏塔のような持物を、胸前で掌上に置いている。また普賢は、植物の茎を持つが、その先端部は後補の錦片の陰になり、何であるのかわからない。もしこれが三蕾の華なら、敦煌の普賢菩薩に一致することになる。

いっぽう除蓋障は、現状では特異な形状をした白色の鉢あるいはカパーラを持っている。しかし詳細に検討すると、鉢には放射状の線が刻出されており、本来は三目宝珠であった持物を、誤って白色に彩色したものと思われる。

これらの菩薩の持物のうち、水瓶を持つ観音は、唐時代の中国作品では稀ではないが、八大菩薩中の観音の図像としては特異である。また安西榆林窟につづいて、ビドでも剣を持つ虚空蔵が確認されたことは、八大菩薩の比定についての頼富教授の説を裏づけるものといえよう。これに対して除蓋障の持物を三目宝珠とするなら、これは安西榆林窟とは一致せず、幢幡を持つ菩薩を地蔵とし、宝珠を持つ菩薩を除蓋障とする、松長恵史説に合致することになる。

残念ながらビド大日如来堂像は、いまだ実見の機会に恵まれず、写真によって判断するより他ないため、不明な点も残されている。しかし9世紀初頭の八大菩薩像で、尊名を記した銘をもち、持物が明確に判別できる作例は稀なので、今後胎蔵大日八大菩薩の図像を研究するための、貴重な資料となることは疑いない。

このように胎蔵大日と八大菩薩の組み合わせは、吐蕃占領下のシルクロード地域とチベット本土で、かなりの造像例が確認されている。

5　チベット系の胎蔵曼荼羅の作例

チベット系の胎蔵曼荼羅の作例としては、ローケシュ・チャンドラ博士によって刊行された*A New Tibeto Mongol Pantheon*の曼荼羅集の中に、胎蔵曼荼羅の白描画が収録されている。これはゴル寺タルツェ僧院長であったソナム・ギャムツォ氏が秘蔵していた資料を底本としたもので、その後原本も『西蔵曼荼羅集成』と題する豪華本として刊行され、カラー図版が参照できるようになった。

いっぽう富山県[立山博物館]が購入した作品は、様式的には19世紀の作と思われるが、ゴル版よりも版形が大きく、一尊一尊の図像が明瞭に判別できるので、図像学的には貴重な資料である。

さらにロンドンの古美術商Anna Maria Rossi & Fabio Rossiが1993年に出版した*Tibetan Painted Mandalas*にも胎蔵曼荼羅の写真が掲載されている。この曼荼羅は、様式的に13世紀に遡りうる美品であるが、ローケシュ・チャンドラ版と同じく、主尊の大日を東面させるなど、異色の配置をとっており、伝来の由緒についてはさらなる検討が必要と思われる。なおFabio Rossi氏によれ

ば、この作品は日本のコレクターが購入したとのことであるが、その後所在は不明となっている。

この他、現在もチベット国内に残存する作例としては、中国甘粛省ラブラン寺(後述)の時輪学堂所蔵のタンカが挙げられる。この曼荼羅は、様式的に見て、同学堂に『大日経』のコースが設けられた1861年以降の成立と思われる。

いっぽう青海省のラジャ寺(後述)には、胎蔵曼荼羅の白描図像が伝えられている。この曼荼羅は、砂曼荼羅の下図として作られたもので、諸尊(胎蔵大日のみは種字)は三昧耶形で描かれている。

さらに発表者は、W.E.クラークにより、*Two Lamaistic Pantheons*と題して刊行された北京慈寧宮宝相楼の鋳造仏立体曼荼羅中に、胎蔵曼荼羅のセットが含まれることをつきとめ、その図像解析の結果を報告した。

慈寧宮宝相楼のコレクションは、主尊の胎蔵大日如来から、除蓋障部の救意慧菩薩までの、ほぼ100体が造像されている。またその尊容も、持物から印相に至るまで、識別できるものが多い。発表者が、その図像を解析したところ、チベット語の資料では、パンチェン一世ロサンチューキギェンツェン(1570-1662)の胎蔵曼荼羅儀軌に最もよく一致することがわかった。

これらチベット系の胎蔵曼荼羅を日本の作例と比較して、注目すべき特徴としては、以下の諸点が挙げられる。

①中台八葉には毘盧遮那のみで、四仏四菩薩を描かない。
②金剛手部の眷属をわが国では十六執金剛と数えるが、チベットではこれを十二執金剛と数える。
③十二執金剛は初重の西面に列するものと、南面に描くものの両者がある。
④遍知院の三角形がわが国のものと逆に、下向きに描かれている。
⑤全体の尊数は、ほぼ122尊である。

このように日本の現図曼荼羅と比較すると、チベットの胎蔵曼荼羅は、本軌である『大日経』「具縁品」の所説により忠実であることがわかる。また善無畏は『大日経疏』において、胎蔵曼荼羅の二重と三重を入れ替えているが、チベットの胎蔵曼荼羅には、『大日経』の所説を変更するような配置替えは存在しない。

つぎに前記の四点のうち、まず①について考えよう。『大日経』「具縁品」では、胎蔵四仏が、白檀曼荼羅の部分に説かれるが、胎蔵曼荼羅本体を説いた部分には言及がない。日本所伝の中台八葉に見られる五仏四菩薩の構成は、後半の「入祕密漫荼羅位品」の所説に基づいている。チベットの胎蔵曼荼羅は、もっぱら「具縁品」に基づくので、中台八葉に四仏四菩薩を描かなかったのであろう。

なお日本個人蔵版では、中台八葉院ではなく、曼荼羅の四門のトーラナ上に、四仏が描かれている。しかしその尊容は、金剛界の四仏と同じであり、「胎蔵図像」と同じく、胎蔵の四仏を対応する方位の金剛界四仏と同一視する見解が、かつてはチベットにも存在したことを示している。

つぎに②と③について見よう。金剛部の眷属は「具縁品」には詳説されないが、「祕密漫荼羅品」では「謂虚空無垢　金剛輪及牙　妙住與名称　大忿(分)及迅利　寂然大金剛。并及青金剛　蓮華及廣眼　妙金剛金剛　及住無戯論　無量虚空歩」と十六尊の執金剛が説かれている。ところがチベットでは、妙住と牙、名称と大分、蓮華と広眼、妙金剛と金剛を同躰と見て、十二執金剛と数える。

十二執金剛は、ゴル版、ローケシュ・チャンドラ版、日本個人蔵、ラブラン寺の4本では、初重の西面(持明部に相当する)に列するが、立山博物館本とラジャ寺本では初重の南面、すなわち金剛手部に描かれている。わが国所伝の曼荼羅でも、「胎蔵図像」と現図曼荼羅は十六執金剛を初重南面に列するが、金剛智・不空系の「胎蔵旧図様」では、初重西面の不動と降三世の間に配しており、この問題については古来より異なった解釈が存在したことがわかる。また立山博物館本では、執金剛の尊数も、16尊以上描かれている。

つぎに④の遍知印の形態であるが、これは後期密教で曼荼羅の生起に先だって観想されるダルモーダヤDharmodayaが、逆三角形であることと関係するように思われる。

このようにチベットの胎蔵曼荼羅は、日本所伝の胎蔵界曼荼羅より本軌である『大日経』「具縁品」の所説に忠実であるが、一部では「祕密漫荼羅品」の所説も援用していることがわかった。

6　チベットにおける胎蔵曼荼羅の資料

このように発表者は、チベット系の金剛界曼荼羅と胎蔵曼荼羅の作例と資料について、すでに20年に亙って研究を続け、その主な成果は『インド・チベット曼荼羅の研究』(法藏館)にまとめられた。

ところが平成6年から8年にかけて、発表者が主任学芸員を務める富山県利賀村の「瞑想の郷」で、チベット版両界曼荼羅の復元製作が始まると、さらなる図像資料と文献が必要になってきた。

チベットでは、金剛界曼荼羅の資料は比較的豊富で、有名なラダックのアルチ寺三層堂や、ペンコルチューデ仏塔の壁画をはじめ、作例もかなりの数が遺されているのに対し、胎蔵曼荼羅の資料はきわめて乏しく、作例も2～3点しか知られていなかったからである。

そこで平成7年に胎蔵曼荼羅の復元製作がはじまると、発表者が提供したテキストに詳しい記述のない曼荼羅の度量法や、図像の細部、持物の形状がよくわからないなどと、画家が不満をもらすようになった。

そこで筆者は、同年秋にアムド(北部チベット)を訪れる予定の服部幸雄氏に、胎蔵曼荼羅の資料を蒐集するように依頼した。これは、ツェテン・シャプドゥンの『蔵族歴史年鑒』により、アムドのゲルク派の本山ラブラン寺(甘粛省夏河県)の時輪学堂に、1861(辛酉)年から『大日経』のコースが併設されたことを知っていたので、何らかの資料があると予想したからである。

そして服部氏がもたらした資料と情報は、予想をはるかに上回るものであった。アムドでは、ラブランだけでなく、青海省のラジャ寺(1769年創建)にも胎蔵曼荼羅の伝統があり、いくつかの資料が遺されていることがわかった。

なおこれらの文献のいくつかは、上述のパンチェン一世の儀軌のように、筆者が画家に提供していた資料と同一であったが、従来はその存在さえ知られていなかったテキストも含まれていた。またラジャ寺からは、上述の白描曼荼羅の写真の提供も受けただけでなく、いくつかの写本儀軌の提供を受けた。なおこれらの資料は、発表者が写真やコピーを撮影した後、ラジャ寺に返還した。

7　ペンコルチューデ仏塔に描かれた胎蔵曼荼羅諸尊の図像

いっぽう上述のペンコルチューデ寺院仏塔には、胎蔵曼荼羅を描いた壁画はないが、その諸尊を個別に描いた壁面が遺されている。

このうち仏塔２層にある普賢堂(クンサン・ラカン)には、『大日経』所説の二十五菩薩の壁画が描かれている。これらは胎蔵曼荼羅において、第三重に配される文殊部、除蓋障部、虚空蔵部、地蔵部に属する25尊の菩薩である。

いままで紹介した胎蔵曼荼羅の作例は、ゴル版がほぼ38.5cm四方、日本個人蔵作品が64×53cm、富山県[立山博物館]本が51.5cm四方であり、諸尊の尊容を詳細に検討するには小さすぎた。これに対して普賢堂壁画では、一尊のサイズが大きいばかりでなく、各尊が一々丹念に描かれており、資料的価値は高い。

いっぽう同じ２層にある不空羂索堂(トゥンシャク・ラカン)には、胎蔵曼荼羅諸尊の壁画が遺されている。

不空羂索堂の壁面は、東壁の一部がひび割れのため損傷しており、剥落した部分が補筆されている。しかしその他は、当初の状況を留めると推定される。

東壁は中央に全段突き抜けで1.胎蔵大日を大きく描き、その向かって左に３.観音、右に10.金剛手を、他の尊格の２倍の大きさで描く。この配置は、胎蔵曼荼羅の基本をなす仏蓮金の三部構成を、強く意識したものといえる。

いっぽう南壁は、中央に86.文殊(施願金剛)を大きく描き、その向かって左上に文殊部の眷属87.網光、右上に89.宝冠を配する。また文殊の左右の菩薩には記入尊名がないが、他の尊格の配置から考えて、88.無垢光、90.髻設尼と推定される。

いっぽう西壁は、入口の左右で諸尊の配置が異なる。このうち入口向かって左側は、縦長の壁面を縦７段横２列に区切り、合計14尊を描いている。このうち上部の９尊は、91.優婆髻設尼以下の文殊の眷属である。なおこれらの眷属は、右(向かって左)を向いているが、これは彼らが、南壁中央に描かれる文殊の眷属であることを示している。いっぽう残余の５尊は、第二重(外金剛部)に描かれる74.弁才天以下の天部である。

これに対して入口右側には、中央に全段突き抜けで34.釈迦牟尼が大きく描かれ、その左右には35.仏眼、36.毫相以下の釈迦部の眷属と二龍王の、都合11尊を配する。なお釈迦部の眷属は、この壁面に入りきらないので、43.普華天子以下が、東壁にはみ出して描かれている。

また83.地天女が釈迦牟尼の周囲に描かれるのは、本壁画が、地天女を初重ではなく第二重の釈迦部に配する、富山県[立山博物館]本のような作品を念頭に置いていた可能性を示唆している。

以上のように不空羂索堂に描かれる胎蔵諸尊を合計すると、78＋５＋14＋12＝109尊となる。これを通常、チベット系の胎蔵曼荼羅に描かれる122尊と比較すると、13.金剛針眷属、15-16.金剛部眷属、53-56.火天の六仙のうち４人、59.黒夜、60-63.母天衆、73.地天の13尊を欠くものの、主要尊をほぼ網羅していることがわかる。

普賢堂と不空羂索堂では25尊の菩薩が共通して描かれているが、両作例における各菩薩の図像は、予期に反して、ほとんど一致しなかった。両者は、儀軌に規定される標幟に関しては一致するが、標幟の持ち方や、持物を持たない手の手勢、そして身色が、ほとんど一致を見なかった。したがって両者は、プロトタイプを共有していないことが明らかになった。

両者の相違が、別系統の祖本に起因するものか、儀軌に規定されていない図像の細部を、画家が自由に解釈して描いたために生じたのかは、今後他作例や文献資料と比較しつつ、慎重に検討しなければならない。

8　結　論

このようにチベットでは、古代吐蕃王国時代に『大日経』が伝えられ、胎蔵大日と八大菩薩が、仏堂の本尊と眷属の組み合わせとして、広く行われていたことがわかった。

これに対して、釈迦如来(とくに金剛宝座型)や阿弥陀如来に八大菩薩を組み合わせる構成も、９世紀に存在したことがわかる。そして後世のチベットでは、胎蔵大日に代わって金剛宝座型の釈迦如来に八大菩薩を配する様式が、一般的になった。

ラトナギリ第１祠堂中庭像の成立年代については諸説あるが、宮治昭教授は８～９世紀としている。いっぽうマランドラは、インドにおいて本尊と八大菩薩という組み合わせが完成するエローラ第12窟を、ラーシュトラクータ朝による大規模なヒンドゥー教窟開鑿の直前、すなわち700から730年の間に置いている。

エローラの後期仏教窟については、その成立を10世紀まで下げる意見もあるが、後期仏教窟には、まれに一面四臂像が現れるだけで多面広臂像に乏しいこと、胎蔵系に近い図像が多く、金剛界系の図像は、最後の第12窟に金剛界大日三尊が見られるに過ぎないことを考慮すれば、マランドラの時代設定は、妥当なものといえよう。

いっぽうこのような胎蔵大日八大菩薩がチベットに伝播した時期として、サムイェー寺が創建された８世紀後半から、チャムドゥンとビド摩崖仏に至る９世紀初頭という期間は、きわめて妥当である。

なおサムイェーは、インドのオーダンタプリ寺院に建築プランの範をとったと伝えられる。この際、内部に安置される仏像の選択にまで、オーダンタプリの例が参照されたかどうかは明らかでないが、この事実も、インドにおいて釈迦あるいは毘盧遮那を本尊とし八大菩薩を配する形式が、普及していたことの傍証となるであろう。

発表者は『敦煌　密教と美術』において、敦煌では、８世紀前半には、陀羅尼信仰ならんで『大日経』系の密教が流行していたが、吐蕃占領の前後から、『大日経』系に代わり、『金剛頂経』系の密教が有力になったと推定した。

これに対して中央チベットでは、『金剛頂経』系の密教が、いつ頃『大日経』系に取って代わったのか、現段階で明確な時期を設定することは困難である。しかし上述のネーサル寺院において、般若仏母堂がレルパチェン王、金剛界大日を本尊とした五仏堂がティソンデツェン王の建立と伝えられるのに対し、オクミン大日如来堂は、ソンツェンガムポ王の創建とされるのは示唆的である。

ソンツェンガムポの治世（7世紀前半）に、『大日経』がすでに伝播していたと見るのは、時代錯誤の可能性が強い。しかし胎蔵大日を本尊とするオクミン大日如来堂が、金剛界五仏を祀る五仏堂より先行したというのは正しい所伝であり、中央チベットにおいても、インドにおける密教の展開を反映して、金剛界系の図像が、しだいに胎蔵系に置き換わった証左と考えられる。

また今回の考察によって、本尊仏と八大菩薩に、さらに2尊を加えて十大菩薩とする方軌や、不動・降三世の二大明王を加える配置も、行われたことがわかった。また付加された2菩薩に維摩が含まれる事例が、敦煌出土の『眷属を伴う毘盧遮那讃』の他、サムイェー寺に2例、そして『文殊師利法宝蔵陀羅尼経』や韓国の慶州石窟庵を加えれば、都合5例も存在することもわかった。これについては、今後さらなる検討が必要であるが、尊像配置の歴史的発展を考える上で興味深い事例といえよう。

発表者が『曼荼羅イコノロジー』以来指摘してきたように、胎蔵大日と八大菩薩の組み合わせは、胎蔵曼荼羅から主要尊を摘出したというだけでなく、胎蔵曼荼羅の成立自体にも、重要な役割を果たしたことがわかっている。（49頁参照）また不動・降三世の二尊構成は、胎蔵曼荼羅の持明部と共通しており、これも『大日経』系ということができる。

それだけに7世紀から8世紀にかけて、この組み合わせがアジア各地で流行したことは、胎蔵曼荼羅の成立地と時期を考える上でも、重要であると思われる。

いっぽう胎蔵曼荼羅自体も、吐蕃時代に伝えられたと考えられるが、現在のところ吐蕃時代に遡りうる胎蔵曼荼羅の造像例ならびに現存作例は知られていない。

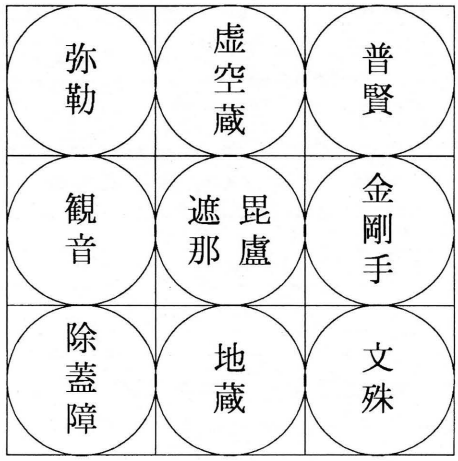
これに対して、現在チベットに伝えられる『大日経』と胎蔵曼荼羅の灌頂系譜は、いずれもインドのジェーターリからパリ訳経官（1040-1111）を経て、チム一族に伝えられたものである。またペンコルチューデ仏塔不空羂索堂の壁面上部には、『大日経』の歴代ラマが描かれているが、その法系もチム流に合致するので、チベットに現在残存する法系は、この一系統のみと思われる。

したがって現在チベットに遺される胎蔵曼荼羅が、吐蕃時代のブッダグヒヤ流を継承すると見なすことには無理がある。しかし基本的に同じ法系を継承しながら、どうして作例間で図像や配置が一致しないのか、金剛界や『秘密集会』に比して、曼荼羅各部の比率や意匠に差違が大きいという問題も、今後検討すべき課題である。

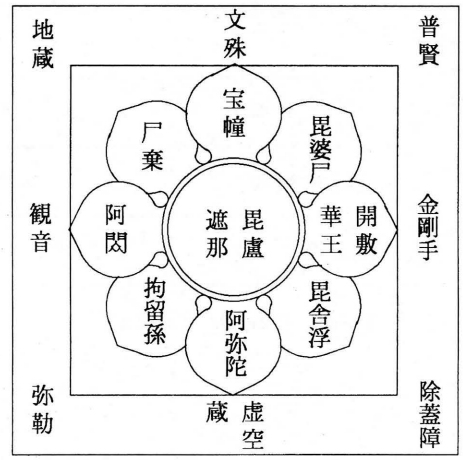
インドで7世紀から8世紀にかけて流行した胎蔵系の密教図像は、その後インドではしだいに忘れ去られ、失われてしまった。それだけにチベットに遺された胎蔵系の密教図像とその伝承は、単に古代・中世チベットの仏教図像を解明するだけでなく、わが国の密教図像の根源をなす胎蔵曼荼羅の起源を知る上でも、かけがえのない無二の資料といえるのである。

胎蔵界曼荼羅と八大菩薩

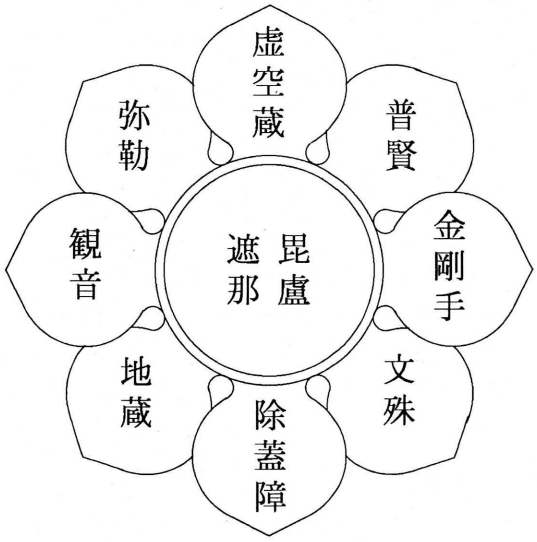
エローラ石窟（頼富）



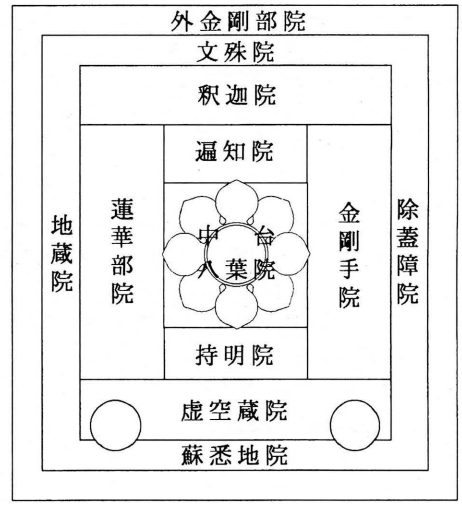
金剛手灌頂タントラの曼荼羅



尊勝曼荼羅（不空系）



胎蔵界曼荼羅



主尊に八大菩薩を組み合わせた例(11世紀以後の作例は除外した)

1.主尊＋八大菩薩			
	①禅定印		
		A.胎蔵大日	ラトナギリ胎蔵大日・敦煌出土Stein Painting No.50 ビド大日如来堂・チャムドゥン摩崖仏
		B.阿弥陀	開法寺板彫阿弥陀曼荼羅
	②転法輪印		エローラ第12窟１階・ウダヤギリ転法輪印如来像
	③触地印		ラトナギリ第１祀堂像ほか
2.主尊＋八大菩薩＋二菩薩			
	①禅定印		胎蔵大日八大菩薩仏龕(灌頂菩薩＋摩頂菩薩) エローラ石窟八大菩薩曼荼羅(脇侍は払子を持つ)
	②説法印		『文殊師利法宝蔵陀羅尼経』(維摩を含む)
	③触地印		韓国慶州石窟庵(維摩を含む) エローラ第12窟２階・３階(脇侍は払子を持つ)
3.主尊＋八大菩薩＋不動・降三世			
	①禅定印		尊勝曼荼羅(不空系)
			ネーサルの大日如来堂(寺伝では不動が左右２体)
4.主尊＋八大菩薩＋二菩薩(維摩を含む)＋不動・降三世			
	①禅定印？		『眷属を伴う毘盧遮那讃』
	②触地印		サムイェー寺ウツェ１階
5.主尊＋八大菩薩＋二菩薩(維摩を含む)＋金剛力士			
	禅定印？		サムイェー寺ウツェ２階

本発表で紹介した作例における八大菩薩の配置

Stein Painting 50(Whitfield説)

弥勒	阿弥陀↓大日	観音
地蔵		普賢
観音→文殊		除蓋障
虚空蔵		金剛手

胎蔵大日八大菩薩仏龕(発表者の推定)

弥勒	胎蔵大日	観音
虚空蔵		除蓋障？
普賢		文殊
地蔵		金剛手

安西榆林窟第25窟(左辺は損傷)

地蔵	虚空蔵	盧舎那仏		
文殊	弥勒			

ビド摩崖仏(『中国蔵学』)

弥勒	虚空蔵	胎蔵大日	普賢	金剛手
地蔵	観音		文殊	除蓋障

八大菩薩曼荼羅(エローラ12窟２階)

弥勒	虚空蔵	普賢
観音	胎蔵大日？	金剛手
除蓋障(地蔵)	地蔵(除蓋障)	文殊

ウダヤギリの八大菩薩
(Donaldson/Malandraを頼富説によって補正)

普賢→虚空蔵	転法輪印如来	虚空蔵→普賢
弥勒		金剛手
観音		文殊
地蔵		除蓋障？

※地蔵と除蓋障に関しては頼富説と松長恵史説が異なる

『文殊師利法宝蔵陀羅尼経』（大正蔵20/794b）

無尽意	虚空蔵	普賢	観自在	文殊師利	釈迦牟尼	弥勒	無垢称	除一切障	月光	金剛蔵

ニューデリー国立博物館蔵（宮治昭説）

虚空蔵	地蔵	文殊	観音	触地印如来	弥勒	金剛手	普賢	除蓋障

サムイエー寺ウツェ１階

	触地印如来	
虚空蔵		普　賢
弥　勒		金剛手
観　音		文　殊
地　蔵		除蓋障
喜吉祥		維摩居士
降三世		不　動

（王統明示鏡＋現状［2001年］）

サムイエー寺ウツェ２階

	毘盧遮那				
	燃灯	阿弥陀	釈迦	薬師	弥勒
虚空蔵					普　賢
弥　勒					金剛手
観　音					文　殊
地　蔵					除蓋障
喜吉祥					維摩居士
忿怒カン					忿怒キン

（王統明示鏡・現状では本尊が入れ替わっている）

【Abstract】

Materials Concerning the Vairocanābhisambochisutra (Dainichikyō) and the Garbha (Taizō) Mandala in Tibet

TANAKA Kimiaki
The Eastern Institute, Inc.

The Ryōkai Mandalas that were conveyed to Japan from Tang China at the beginning of the ninth century did not only constitute the center for the Buddhist icons in Japan, but they also affected the entire culture of Japan as well. Among these, sources related to Vajradhātu (Kongōkai) Mandala are relatively abundant as the original shape in India, or documentary records and drawings in Nepal and Tibet, where the Mandalas were inherited, are preserved. However, as much as the Garbha (Taizō) Mandala is concerned, there are very few documentation left today as esoteric Buddhism based on the Vairocanābhisambodhisūtra waned in India quite early. Still it was known that Vairocanābhisambodhisūtra was conveyed from India to Tibet during the Tu-fan (吐蕃) era, and although they are very rare, there still are examples of Garbha Mandala in Tibet.

Several examples of Garbha Mandala of Tibet such as the mandala that Rev.bSod-nams rgya-mtsho brought with him during his exile, or that preserved in the Tateyama Museum in Toyama Prefecture were known heretofore, yet I have been able to collect documentary records, line drawings, and photographs in amounts that exceeded expectations during the investigations for the restoration works on the Tibetan version of Ryōkai Mandalas, undertaken between 1994 and 1996 at "Toga Meditation Museum" in Toyama Prefecture. Based on that study it appeared that examples of Garbha Mandala of Tibet revealed considerable differences from each other concerning the disposition of each deity, or their iconography.

The thang-ka that Rossi and Rossi in London put on sale in 1993 is the oldest article with the possibility that it can be dated to as early an age as 13th century, and the main image on it faces east, and the arrangement of each other image is reverse. And on the upper story of four gates four Buddhas of Garbha Mandala (Taizō-shibutsu) are depicted. On the other hand there are wall paintings of Garbha Mandala images in Kun-bzang Lha-khang (Samantabhadra-chapel) and Don-zhags lha-khang (Amoghapāśa-chapel) at dPal-khor chos-sde Pagoda (early 15th century).
The transmission of Vairocanābhisambodhisūtra and Garbha Mandala in Central Tibet has basically ceased, yet I discovered that the transmission is still alive in Amdo (Northern Tibet) in a very limited manner. There are lectures on Vairocanābhisambodhisūtra in the Dus-'khor grva-tshang (Kālacakra College) in the Labrang monastery (Kansu,China) and I have succeeded in photographing the thang-ka of the Garbha Mandala kept in the Dus-'khor grva-tshang during my 1996 searches. The Labrang version resembles with the Tateyama Museum version, and seems to support my estimations that this piece was Amdo origin.

I have also obtained numerous wood prints on rituals (giki) preseved at the Labrang monastery. These contain texts whose existence were already known, or even reproduced as the Panchen Lama I, and Panchen Lama III's ritual manuals on Garbha Mandala, but they also contain such texts as bTsun-gzugs shes-rab rgya-mtsho's 62-folio manual which were hitherto unknown. bTsun-gzugs shes-rab rgya-mtsho's birth and death dates are unclear, I have heard that he was a learned priest

pursuing his studies at the Dus-'khor grva-tshang in the Labrang monastery.

On the other hand, I have been able to obtain from the Rva-rgya monastery at Chinhai Golok Prefecture, the copies of the Samaya Mandala in line drawings that froms the rough design of the Sand Mandala, and also the copies of the woodblocks and the manuscripts of ritual manuals kept at the same monastery. Part of these documents, such as the Panchen Lama's rituals as mentioned above are already known, yet there also texts such as the iconometrical notes of the Garbha Mandala even the existence of which were hitherto unknown.

In this presentation, I will attempt to shed light on the enigma of the Vairocanābhisambodhisūtra in Tibet and the Garbha Mandala, and make comparisons with the pieces in Japan, and outline their characteristics, based on the paintings and documents mentioned above.